

大阪における交通を取り巻くデジタル媒体の最新動向

つちや きいち
土屋 樹一

交通経済研究所主任研究員

■はじめに

2025年4月13日に幕を開けた大阪・関西万博は、最終盤において入場も困難になるほどの盛り上がりを見せ、2025年10月13日に閉幕をむかえた。日本国際博覧会協会が2025年10月14日に行なったリリースによれば、一般来場者数は2557万8986人を記録し、2005年愛知万博の約2205万人や、1990年に大阪で開催された花の万博の約2313万人を上回る結果になったとのことである。

鉄道を利用した万博の観客輸送においては、JRゆめ咲線の桜島駅からのシャトルバスルートと大阪メトロ中央線の夢洲駅からの徒歩ルートが、重要な役割を果たした。それを踏まえ、大阪メトロとJR西日本においては、万全な輸送体制を構築するだけでなく、万博の最寄り駅や主要駅および車内に至るまで、様々なデジタルサイネージ等を整備し、魅力的な映像表現を展開した。今回は交通を取り巻くという視点で、万博に合わせて展開された象徴的な事例を3点紹介する。

■特徴的な映像表現事例

①「JR WEST Parade Train」

JR大阪環状線とゆめ咲線において運行され

ている323系車両（写真1）を活用して展開された。これは323系車両の客室全長にわたってLEDパネルを設置し、映像コンテンツを表示できるよう改造されたもので、323系2編成の桜島駅方面の先頭車両1両ずつ、合計2両が運行された。そして2025年4月13日の万博の開幕にあわせて、大阪・関西万博期間用の演出を開始した。パレードに包まれるオープンカーのような開放感を演出するため、外の景色をリアルタイムに投影し、AR（Augmented Reality拡張現実）技術を用いて「EXPO 2025 Design System」のストーリーに沿った演出で万博への期待感を高めるとともに、駅区間ごとに大阪をモチーフにしたキャラクターや、紙吹雪・花火・シャボン玉などのエフェクトを表示し、にぎやかさを表現した。昨今リアルとバーチャルの融合が話題化しているが、リアルな景色とコンテンツを融合させた取り組みを実現させたことは先進的である。またGPS（Global Positioning System位置情報測位システム）を活用して車内演出を行っているため、今後列車の走行位置にあわせた各種情報提供に活用することも可能である。



写真1 JR WEST Parade Train (323系)

② 「LINQ VISION」

JR大阪駅・京都駅・広島駅に万博開催期間中に設置された360度全方位からの視認ができる球体LEDビジョンを活用した映像表現である(写真2)。これによって平面のディスプレイでは表現できない、立体的な映像や没入感のある映像を投影することを可能とした。大阪駅には屋外用球体LEDビジョンとしては日本最大級となる3mの球体LEDビジョン、京都駅と広島駅には1mの球体LEDビジョンが設置された。センサー機能が搭載されており、ビジョンに近づくと微笑んで話しかけてくる等の演出が展開された。また2025年5月末からは、スマートフォンで二次元コードを読み込み、選択したアクションによって球体ビジョンのキャラクターのリアクションや表情が変化し、双方向のコミュニケーションが楽しめる機能が追加された。万博にあわせ駅構内にコミュニケーションができる空間を醸成し人々とのふれあいの場を提供することで、駅空間のプレゼンスの向上を図ることを目的に実験が行われたが、今後例え駅利用者とのコミュニケーションツールとして活用する等、様々な可能性が感じられた。



写真2 LINQ VISION (JR大阪駅)

なお両企画はJR西日本が主宰する共創の場である「JR WEST LABO」における施策として実施された。鉄道の利用案内や広告等、今後これらの技術を活用してどのようなサービスが創出されていくのか、注目される。

③ 「夢洲駅大型LEDビジョン」

大阪メトロが夢洲駅の開業にあわせて2024年10月に新設した媒体である。「移世界へ導く」門型照明、鏡面の素材からなる折り紙天井を表現したもので、縦3m×全長55mと全長については地下空間に設置したビジョンとしては日本最大級である。大阪メトロはすでに2019年12月に御堂筋線梅田駅に縦4m×全長40mと当時としては世界最大となるLEDビジョンを設置し、地下空間ギネス世界記録認定を受けているため、このノウハウを活用しての新設である。これについては万博終了後も継続して設置されるため、例えば横長の画面を活用し、乗り物の走行シーンや陸上競技の選手と一体化できるような映像放映を展開する等、今後も様々な魅力ある情報提供が期待される。

■まとめ

今回紹介した事例は位置情報やセンサー技術を活用した情報提供、動画コンテンツを活用した魅力ある空間提供という今後の鉄道サー

ビスの付加価値向上に寄与する先進的な取り組みであったと評価できる。なお、今回紹介した3事例はいずれも（一社）デジタルサイネージコンソーシアムが主催する「デジタルサイネージアワード 2025」においてグランプリまたは優秀賞を受賞している。詳しい内容についてはデジタルサイネージコンソーシアムのホームページをご覧いただきたい。